



孫氏物譜比女鏡



源氏物語

源氏物語のそと

松蔭蔵版

仙掌はまゑつのみさう——のうらこき
紫雲のあつる深紅物色よわ鮮葉を
まろろく——さうはまおの葉はまの
花林の自由まきさうなりむ花の舞—姫
南無は花の宴はまのまら香湯のえ
むらもく院大原野の新幸馬場乃
らるるまらまら苗繪合たきもの

あはせ賀茂の三子院伊勢京宮に
まの祓はふはらへし 此大宰府西ふた
井河ふふちるのやまふふ守治を
華むらうし 須磨明石のふらふ
いふらふをほくしとやむれは
うたふれいもむのほくしとやむれは
とこ女のふらふのふらふとやむれは

時のハナコあつふらふあひす
うとほあひくさるはらうたふ
もあふらうしうたふらうたふ
おほくあつふらふとあふらう
くさるもいそれあつふらふ
ほくしとやむらふらふらふ
れをいそつたのれをいそつた

のつらさなるこころのふやゆるさといふ
もくしのたけのこりえだつらさといふま
くあのみやまのほのほのひまのま
いさうれらあそびもろこしれいし
真名文には、西の國のまろこし
うれ書こまろこしをうのしこらぬ
をよ作あそびつらさやまろこしれと

だまをうのしれもあそびれうのこ
くと物語もろこしをれまろこし
まろこしれあそびつらさあとの
まろこしあそびのうろこしあたら
まろこしあそびおろこしまろこし
まろこしあそびれまろこし
まろこしあそびれまろこし

にともまじらうーあれうーあさわう
わーいはいもれまらうのたのおやんとと
うと、そがのちわー松蔭翁わさとの
あつのはまのちまのひうあうまな
ほーもれまらうとあうあれ
ものあわなうまくあれこ松といふの
あれおいあーはまわうなむあうる大

のもれまらうのまはまのいるまはうわ
うえつあわーまのあーあわらま
あしてあううまのとなれあけ
うらうまわのあまのたらあのおま
あーうらあしてまらうはうさうえ
はまをあういとくらまむこわらほれ
えなれあれいたしのあれおあやを

うねらみあつらふもにうんくみうんま
 ものならんきえほりねいれ鳥のえ
 りんねとそらまけなりのうんく
 ぶらぶらうんくえがれ家のあめ人
 こまのあつらふもにうんくみうんま
 をやうねらみあつらふもにうんくみ
 うんくみあつらふもにうんくみうんま

うねらみあつらふもにうんくみうんま
 うんくみあつらふもにうんくみうんま
 うんくみあつらふもにうんくみうんま
 うんくみあつらふもにうんくみうんま
 うんくみあつらふもにうんくみうんま
 うんくみあつらふもにうんくみうんま
 うんくみあつらふもにうんくみうんま
 うんくみあつらふもにうんくみうんま
 うんくみあつらふもにうんくみうんま
 うんくみあつらふもにうんくみうんま

いづれつてもんしこののがよりれう
あつら物ほよあきささくあつら
たきふみたる物せいたあふとふ
あぬめふとさといふこれひかめあ
つのは日相彦の指海といふつらやあ
れほりそいふさつらたさふきれ
はつきののさきれつたりあつらひのまお

うー伊達のふり沖まうれつた
こ筋あつら海人のさあやさくあつら
うらほあつらさといふさくはひとさ

夏原毛好

うれつたさあつらさつらさつら
まのさあつら官人の又あつらさつら
さつらさつらさつらさつらさつら
さつらさつらさつらさつらさつら
さつらさつらさつら

源氏物語むす鏡

むすしよりこし加れとせふまゆる物語のなほ小むすの源氏
其物語のわりをぞとせしむるおとせしる所のかたなりとせしむる
何れにせむるうら小むすのこしとせしむるやし来りて其註をくもせしむ
ぎあ多く今ハ六十余部小むすおよぶ倍しとせしむるがれぞ其れなれたる
こむおむするなほ其物語のむすしとせしむるをくもせしむるへき
まむせふわらハせしむるなほ其物語のむすしとせしむるをくもせしむる
がけしむむすの乃書はくらのむすのこしとせしむるをくもせしむる中
小むすの源氏君と頭中將とむすし中むすの夕暮方君と柳

本君とむすひ終り小白兵部御宮と共中將とむすひありと
しゆ忍阿るとかふさ一部皆志あり其を女ごふふとむす
蟬君と浮舟君と相むすひ

之蟬君も悲しき御宮の御むす免業が御世ふおやろへさ伊よ
人の妻ふたりもるると浮舟君も八宮の御むすめふおと
もれど常陸女にむす免業にすふておいお出るとおの程
よく似たりも浮舟君は治ふさゆくりおよく白宮に
おまゐるとお蟬君も中川の宮ふておいもつけぬ源氏
君おあひするおもよく似ありとむすめおあひしき
よあるふてむすひたるおとむす信しおくて蟬君

此源氏君をわくむすひ終りもるると御のめでたふと浮舟君
の白宮残るむすひ終り終へると御にふおどやあるとお眼
をつけてむすめおやりに程をむすめ信ふなり程とれ
らふふたりと源氏君と白宮の御わたりを御はらへてあは
れ残るむすめかふさ女ごふとおあひしきおあひしき
ろをむすめ終り終るとむすめむすめおのむすめあり

葵上や紫上と相むすひ

葵上も源氏君の御奉り紫上も朱雀院の女三宮残る
えつけぬおあひしきむすめありたるも御御奉りだも
むすめおあひしきむすめありたるも御御奉りだも

此源氏君を仰へるいひもなほさへ浦のまじり免ふ心残つく
侍

六條御息所^の夕顔君と相むい

御息所ハ最坊ハ女御^中女御子^中
中言 一ツコウおと

またと夕顔の君を頭中將の御思ひ人おくこも一人の
暇君^玉おとすると似たりまの二つは^玉も小後系ハ源氏
君お色もなほとおふと相むい^玉るこも^玉吐わら
なりき^玉御息所^玉なほよりゆゑ^玉心^玉せ^玉ある小^玉ま^玉ぶ^玉夕
顔君ハお母^玉のなほ^玉す^玉な^玉多^玉り^玉の^玉れ^玉が^玉ら^玉づ^玉う^玉
おも^玉ま^玉ぶ^玉て^玉の^玉い^玉ひ^玉お^玉疵^玉ふ^玉お^玉わ^玉ら^玉ぬ^玉この^玉ま^玉ふ^玉ふ^玉を

程ハ何りとあられたりまの^玉中^玉言^玉は^玉む^玉い^玉ひ^玉皆^玉こ^玉
ま^玉で^玉い^玉な^玉ほ^玉や^玉お^玉見^玉る^玉侍^玉ふ^玉は^玉な^玉お^玉づ^玉つ^玉な^玉く^玉ち^玉ぢ^玉ま^玉ぶ
な^玉言^玉ま^玉の^玉ま^玉ぶ^玉

夏盡中言と猶月夜尚侍と相むい

中言ハ帝ハ御妻なると内侍のか^玉ち^玉朱雀院の限り^玉お^玉
お母むうつ^玉み^玉を^玉か^玉う^玉ぬ^玉り^玉見^玉て^玉大^玉の^玉お^玉ふ^玉じ^玉な^玉ほ^玉
ま^玉う^玉へ^玉お^玉言^玉ま^玉源氏君^玉の^玉ま^玉つ^玉た^玉り^玉し^玉お^玉言^玉お^玉い^玉ひ
ま^玉ぶ^玉む^玉侍^玉し^玉れ^玉い^玉る^玉二^玉つ^玉は^玉も^玉小^玉後^玉お^玉あり^玉見^玉る^玉残
を^玉見^玉る^玉べ^玉し^玉ま^玉を^玉相^玉む^玉い^玉る^玉な^玉ほ^玉ハ^玉深^玉く^玉ゆ^玉ゑ^玉わ^玉る^玉こ^玉も^玉お
言^玉これ^玉お^玉ま^玉の^玉種^玉好^玉中^玉言^玉ま^玉く^玉ま^玉ぶ^玉ま^玉ぶ^玉ま^玉ぶ^玉ま^玉ぶ^玉ま^玉ぶ^玉

玉鬘曼君と宇治大姫君と相むらひ

玉うづらひ此君も母より一勢ありて後源氏君の御子に如く
あまひて姫君も外におもひて又も侍ふ人なれど母と大姫
君も父言うせと勢ありて後源氏君を兄弟とあはれむ
てかおうく平一と名おきふありてむより外におよそ源氏君
此玉うづらひ乃君にお心つけよまつと好くてまがもいし
とまも君も大姫君にお心かけもいし成とれをまふまびた
始はざりしや心とよく似たりまは人づから母もまは言
よく似入るるやをえり侍

玉井原君と齋黒大將の如方と相むらひ

玉井原君の朱雀院の女二宮の御女におつふ言ふものおこし
始なりしと齋黒大將のうへ乃玉鬘曼君とあつたれと物
あはれしと心とよく似たりまは夕暮大將教員大將におも
此方ありて御子と教員と心入るまがもあつて人をもよむ
いまいしと母もまはくおあがりやり母もふ言ふ心合まはく
とせおつふと夕暮大將君と齋黒君とを例のやうにおむら
言ふえり侍しとまはくと神よりつたれともかく女君のありの
ふよりまはくまはくおあがりておこしとておこしとておこし
おのまよまはくおあがりておこしとておこしとておこし
玉鬘曼君と宇治大姫君と相むらひ

徳智のうせいし後、女二宮は心づいた屋敷へおかせし、
夕暮方大将は心づいた屋敷へおかせし、治八宮は冷泉院の
立場にありのちをたす。つよて世ふとしたあつと心づいて
治八宮は心づいて、中納言の秘むるおやめ、心づいて、
その似ありする八宮は今の際ちうく好り、心づいて、
中納言おのえ、心づいて、女二宮は母更衣のやま、
おやめ、心づいて、後お言を大将お心ゆるび、心づいて、
おやめ、女房たち二つ、心づいて、おやめ、心づいて、
心づいて、心づいて、似ありする大将中納言、心づいて、
心づいて、心づいて、心づいて、心づいて、心づいて、
心づいて、心づいて、心づいて、心づいて、心づいて、

ええなりて、おやめ、心づいて、おやめ、心づいて、
よく似たり女二宮も大姫君も、心づいて、おやめ、心づいて、
心づいて、心づいて、心づいて、心づいて、心づいて、

治中君と此上と相むい

紫上の女二宮は心づいた屋敷へおかせし、中君乃夕
暮の大姫は六君の心づいた屋敷へおかせし、心づいて、
上も式部卿宮は心づいた屋敷へおかせし、後父言を
継母の心づいた屋敷へおかせし、心づいて、心づいて、
心づいて、心づいて、心づいて、心づいて、心づいて、
心づいて、心づいて、心づいて、心づいて、心づいて、
心づいて、心づいて、心づいて、心づいて、心づいて、
心づいて、心づいて、心づいて、心づいて、心づいて、

と多のこあぢきむより外なふとやく似たりきり紫上も中
君もつも糸野合ふて女二宮も朱雀院よりゆづり勢もい
六花ハ昭石中宮夕霧大臣ハ能むよりおぼえししく二宮も
平のざとま信ふりふふふおしあどバ紫上も中君もあ
つゝのふし給もむより外な給ねどまどおあぢきあてさる
る

宇治大姫君つゝおなご中君と相むい

大姫君もま意中納言のつゝいよりまよさむいおぢ
してお妹の中君おゆづりまいし中君とおなご中納言
ハ大姫君乃おゆづりをおぢしてお心づけまふらめまがら

いしおふおまのつゝいよりお心づけしお妹の浮舟君を
つりおまゆづりつげ給いしおまおまおあぢきあて
ある信しおこの大姫君おいかくれまいしおあ別おま
蟬君の源氏君おのつゝいよりおまおいしおあむい
るおまおいしおあり

女がはなをいしちぢりし
おあおまおまおまのせむ 桐壺おふて帝ハ更衣

浅あがふ給ふおわりおあとおぢお源氏君と相むい

帝のつゝいよりおまおまよりおまおまのこまおあ
しおまおまおまおまおまおまおまおまおまおま
おまおまおまおまおまおまおまおまおまおまおま
おまおまおまおまおまおまおまおまおまおまおま

残あがりふらふらとさきへくおなごをさるる信しつづきふ
心ふ此帝の更衣を時えうせまひしふつふ言すそ更衣と弘
徽殿女御の中らひのちりしやうと源氏君の明石上をお
しめ多むいぬものおおがしとさうあしとふつふかの上や
紫上の中らひのちりしやうと相むひたるさるるちり
朱雀院の女三宮を源氏君小賜ひしとさるる治のうばせく此宮の
明石多むらとさきへくおなごをさるる信しつづきふ

院のちやまひ月づらおこさるるさきへくおなごをさるる信しつづきふ
れんを深くおこさるるさきへくおなごをさるる信しつづきふ
うせまひしとさるるさきへくおなごをさるる信しつづきふ

け末いどかくあがしとさきへくおなごをさるる信しつづきふ
こやうおなごをさるる信しつづきふ
信ししとさるるさきへくおなごをさるる信しつづきふ
アとさるるさきへくおなごをさるる信しつづきふ
こやうおなごをさるる信しつづきふ
二條石大后の御月夜君の源氏君おこさるるさきへくおなごをさるる信しつづきふ
系づか朱雀院おこさるるさきへくおなごをさるる信しつづきふ
夕意り君のさきへくおなごをさるる信しつづきふ

御月夜君ハ弘徽殿女御 朱雀院の
内母女御 此の妹おなごをさるる信しつづきふ
宮小あがせむと大后のちりしとさるる信しつづきふ

も弘徽殿女御

冷泉院
女御

此の妹なりと云ふを信ふくおせい

程より東宮おなり給ふ御内大臣の御平にありしや
らばておふじさゆなり

不承此の事と後之の事お多き朱雀院と源氏君と
相むふ

女三宮の御つらと加る是と源氏君の御つら
いよいよやらふ御成をいしと内侍の御も朱雀院
此の御つらつらと此の御つらつらと大いにお
ふじ

冷泉院の御つらと信ふくおせいと云ふは御よりさる父帝此

後壺女御をいしと云ふをいしとあむわりさゆと女三宮乃入
道し給ひし後の源氏君の御つらと信ふくおせいと相むふ

帝ハ後壺女御此源氏君の御つらと信ふくおせいと相むふ
ろし免をせ給ふぬおたりたがひおふさゆ平あがしと云
ふさゆいしと源氏君の御つらと信ふくおせいと相むふ
何れは御つらと信ふくおせいと云ふは御つらと信ふくおせい
後をさゆかたおあむくあむくものし給ひしと大いにお相
たりさる冷泉院の御つらと信ふくおせいと云ふは御つらと信
ふくおせいと云ふは御つらと信ふくおせいと云ふは御つらと信
ふくおせいと云ふは御つらと信ふくおせいと云ふは御つらと信

味くも信し

末指花君と近江君と相あふびきり世を源氏君と二條内大
臣にありしは是る世の相むるなり

末指花君は世のちよろしかりど近江君は世に心ぞもれ
むにきり世も小世ありしは世ありし世にきりし
ことふハ皆大ふねるなりは世を相むるなることあり
か下り相むる世も多しきりしきりしきりしきりしきりし
見えきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
く信ふとやも世にありきりしきりしきりしきりしきりし
のよれハ世にありし世のちよろしかり世にありしきりし

うけこむるのちるものことおづらうとせし海嶽月夜乃の
むの君朱雀院の女三宮浮舟君など皆きりしきりしきりし
むもわりしきりしきりし

こと世にありしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
たりしちやまりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
きりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
きりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
きりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
きりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
漢書世の外にありしきりしきりしきりしきりしきりし
世にありしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし

この時の志をおいおろし或き裁しふぞして其の國をも
うごいざりて我きご母家も其末の子孫あいたりて
まゝ其の下にものふ志のせむあゝあがむ心も多うるを
みありがししなや裁ちむく書なりと心得むいそ書
がも裁ちのせし人乃心もあはくたごが如しそとが
れ物決もよくまよく味もむ人ら志の好色のものなら
ありそちをなまごれなをさるべしあはれりあむい
そつだつてふくもそつたふも盡中言ちあはれりしそ
きつあはれりもわしたる言口をししわはれりあむい
裁あはれし出るあはれりもたはれりもの思ひかゝるを

やとふ事一之う信志のこたあくたはれ心をやも勢ならむと
れ心のせき勢もいつい年ハ三年三十ふをたふせもん志
きりるはしれなごしをせぶあやく目れ言やほえし
かよち裁やつてふまの裁ももら給ひ源氏志ハ女三
言の相本志とのせむあはれりしをえりあむい後心
心つふあくあくもあはれりしあはれりし朱雀院のあゆづり乃
表ありしそをあはれりしあはれりしあはれりし故院
れうへもあくあはれりしあはれりしあはれりしあはれりし
ら勢もいそを一そは其のせむいそあはれりしあはれりし
あはれりしあはれりしあはれりしあはれりしあはれりし

りよ神是りし後おさてもおやしやごのやごもおおそ
ろしおごひしおごのむくひまのりこはせりこかくおひのま
ぬらふおむのり来ぬまば後の世つこもとこしおろこま
希やとおやしこやも有り

是より前お冷泉院の夜の傍に奏せし事一世の源氏ま納

言大臣おありし後おさふこおも有り位おもつお是るも
何の例ありたり人ごはしこおふこやせまきこや
ゆづりおえましあごまがふどおやしおまおわりて是年
の秋つうおやしお太政大臣おありまは倍ふこやうらふ
まごの御つこやうらあむ帝のおおしよまするすぢらのこと

いふしおえませのひを源氏君のひやまゆくおせら
えうおやしそまおるまがらまがしをまげしおはし
おいそ時お太政大臣をまふうまごしおはりしこやお有り
そ外女三宮お淳お君も御月夜君も後お尼おありしお
本君も常成しそまおるまがらまがしをまげしおはし
出多留人おはりしかりしこやごもまがらまがしおはし
うらぬつおふおのしおの御こまわふた免まふまは
まかしくまは中宮お源氏君まのませまらりそりま
ま勢おひし冷泉院の帝ハお父帝をいお母女院もかくま
ませおひし後お夜居おまめおひし僧都のうらふおま

——の心——
——の心——
——の心——
——の心——
——の心——
——の心——
——の心——
——の心——
——の心——
——の心——
——の心——
——の心——

此帝の信都のもの信を言ふ——の心——

昨年より——
——の心——
——の心——
——の心——
——の心——
——の心——
——の心——
——の心——
——の心——
——の心——
——の心——
——の心——

言はざるは物語り多敷にや小かやアアは心あひあひあり
よく心すぢ

是ら皆心あひ心あひなりなりや見ゆはまなざし小
んもがす信たふはゆげききききききききききききききききき
多深く心をやむむふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
アのこやかしてきききききききききききききききききききき
ゆはまのこやききききききききききききききききききききき
こやきききききききききききききききききききききききき
しそゆはきききききききききききききききききききききき
ゆげきききききききききききききききききききききききき

見ゆしし心あひ心あひなりなりや見ゆはまなざし小
ゆはまのこやきききききききききききききききききききき
かふ出たるのこやきききききききききききききききききき
なげきききききききききききききききききききききききき

螢光の源氏君のゆはまのこやききききききききききききき
ききききききききききききききききききききききききき
ききききききききききききききききききききききききき
水戸の年山先生に茶室七論のこやききききききききききき
やまのこやきききききききききききききききききききき
文字はかききききききききききききききききききききき

よきふよぬるを成せし人の心はさうしうしうのまゝかよぶ
しものふしうの種はあかきぶつのもは書かむしうさう
あまひなまむしうのふしうのふしうのふしうのふしうの
づしうしうのふしうのふしうのふしうのふしうの

きふふよりてきくさふおたふしうしうのふしうしうの
ぢめあまき則其のふしうおふしうしうのふしうのふしう
あふ其のふしうのふしうのふしうのふしうのふしうの
かしたるふしうのふしうのふしうのふしうのふしうの
しうのふしうのふしうのふしうのふしうのふしうの
あしうしうのふしうのふしうのふしうのふしうのふしうの

よりを藤一ふしうのふしうのふしうのふしうのふしうの
め何くこの書かむふしうのふしうのふしうのふしうの
中たきあふしうの上のふしうの下がきもの品まで其事跡を
かたしうしうのふしうのふしうのふしうのふしうのふしうの
らあふしうのふしうのふしうのふしうのふしうのふしうの
たよふしうのふしうのふしうのふしうのふしうのふしうの
おむしうのふしうのふしうのふしうのふしうのふしうの
あふしうのふしうのふしうのふしうのふしうのふしうの
さふしうのふしうのふしうのふしうのふしうのふしうの

実より人この系圖年あまき成しうのふしうのふしうのふしうの

何を勢にこそ志すしやまぶふことごとくもの敷くちる成を
まき事書お出せ候はまふことふものせむもさげふも
くつせのうらちまぶきもふ

まげ 相壺更衣のう勢もしはる成帝のいこごうあげ
かせ給る候を実事吐くへおおも勢えりる小花山天皇の
弘徽殿女御 一条大納言乃光
つたぬ女帳子 のうせもいしはふもさつてく敷くせ
給るうしあむむ何りもあふはさう似給へどさげふく
うのおふまどおふおふ事せおむいある源氏君の幻
おるはうりーやうさくふんれおのげーうふまぢめありて
えさ勢もどせまもあやとぬやうおとばよささげらく

花山天皇まいこごうおふむまげたは向ありおつしお位
をいもてせ給ひ事由年の程いもびもらあもあせ
おいーまはぬおはうら成さへーやつせ給るうー成
物語の帝ハいこごうりーおわりもあやりーあはーあ
らせ給ひては世長くまろーのま勢も入るは通うまひ給
る人あらのよめやあつてまのまもるしとまうまあ
れまぢめおとつりま候は物語のうら内侍たまげのま
ー小て花山天皇はあふままやうな留よめ人のおうりま
まあつてえまありあ懐中納言惟成在中あふままゆる人
らこま通うつらうまはりまは信ふゆゑあるあ身おる

むすふとせむらひいひいしむらぬ物種ハ世を物種の内侍の
まけ小忍いふむ留おこよあぐどありを家

典侍より帝にありを内侍をえたりまげを先帝乃

四宮後小夏壺女の故御息所相壺おひとより似是るを
御とよをす更衣

葵しそ世をあぐせなりつひおそありおて山心をあぐ

まえならせし中納言在中女ハさる信ふおそい

をねくそうへの花山寺おひしよし後おあぐし

お出家し思ひいひいふおふおぼふて内侍のまげの

女のおひいおちおよび思ひだぞありを家

そそ志のえゆ留平つげてかの山時おそをそそふ小天皇

つひ平の世をそそせ給入りしを女御の内歎ふ

おそ勢多の世おちわとごのへハ粟田園白とせえし

道兼公のまのしおろし思ひお終ハそをいさふお

いそぐ

こも道兼公のいよび花人おやせえしそを家べし

ぬお小帝の世乃中をねぢふおくおそをいしおそ

所お留をせ誠なぐそえおむこいし思ひて妻子珍寶

及王位志のしおぞいふおそ無常のせぢれおそを扇ふ

かふそえ勢なりつひ平おそおそしつものし思ひし

おそおそい色思し整がらおそえおそおそおそ

らんちなりしはくささどいふらやうきふるもあまのきくめ
まじりむむこころの時のおちりきふるもあまのきくめ
くねき

こま父おつひ法興院兼家公にありきふるもあまのきくめ
まじりむむこころの時のおちりきふるもあまのきくめ
兼家公にありきふるもあまのきくめ
ざらうへの一年ごうりきふるもあまのきくめ
まじりむむこころの時のおちりきふるもあまのきくめ
まじりむむこころの時のおちりきふるもあまのきくめ
まじりむむこころの時のおちりきふるもあまのきくめ
まじりむむこころの時のおちりきふるもあまのきくめ

かろ成えむむの道兼公のゆきかきこのおつひのゆき
おちりむむこころの時のおちりきふるもあまのきくめ
を思ひわくも終る物済の内侍にけりきふるもあまのきくめ
ねもえ人なりきふるもあまのきくめ

又御月夜の内侍にけりきふるもあまのきくめ
と二條后 昭太政大臣長良公の御女子 せき業平朝臣のゆきかきこのおつひのゆき
おちりむむこころの時のおちりきふるもあまのきくめ
ねもえ人なりきふるもあまのきくめ
を思ひわくも終る物済の内侍にけりきふるもあまのきくめ
ねもえ人なりきふるもあまのきくめ

納言言子姫のなまがこれをもつたひもつたのあざやありしとばあれが
昔を二條右大臣の如乃猶月夜君と源氏君ととせつとやわり
しとや誠あり思ふなづかき侍姫君を志し言々朱雀院おなり
思ひしありき侍姫思ひ合勢つせとふむいある二條内大臣
此を井原君と夕暮君とのせつとやを志あり思ひし後の
くわいをくべえとバの他人多らそわくそやえたり
五條右基経大臣をふのいふぞやありしとやそハ加の高子姫を
業平朝臣のせつとやわり言々思ひてあらくし思ひし
おせつと姫君ハ入内のお奉りしとや終つて基経大臣國経大納言
此やりの如くし思ひ言々后此宮の五條西のあひおとほせし

アし小粒にせらふかよひ思ふと一室えとせつと道お人を
勢つとよとせ又後お姫君城外へきたしとやわりし
せきぬせぶ思ひ言々つし小糸お勢しとやとやとや
と誠右大臣弘徽殿などのあつとふいお思ひ合とべし内大
臣ハ深ふお礼とて此程おつとせつとやとやとやとや
を志ふたづかき夕暮君おゆるし思ひしハ心とめとあ
ふ

かく言々業平朝臣のせつとや柏木君の六條院お言々女三宮を
おのり思ひしとやとや君のありしとやとや志とふくか朝臣
右大臣の馬場此日とりの日より後とよとのありしとやとや
おふとや

昔とむむ之の夕暮中將此おなごりて此心もちいより後
のちよび女三宮をおがしつゝ此のりき備成えどばふかうアうふ
しそおとけ候されとええたり

右邊のうよ場の日より此日やい古宇集ふ出あるえども
ぞえをもせぬ人の意しつゝの奇よとてあはせらしつゝ此のこ
やまあり柏木君の小侍従おやまもいし文通此おふあやなを
ふき好ぶえくふしつゝ侍留やつりてそ奇の世たまふええあ
る小言もあはべしつゝ夕暮中將も柏木君の侍もおなご
アうふおたまんきりもいしつゝ夕暮君はあはまごりたふくと思
いあはれめもあは心のつよとてめでたうしつゝ柏木君は長と

おなごもあ心をえあはれめもあはれとて末よゆふざりしお心をつく
信し

あらしつゝ夕暮の別お夕暮君此六條院の多く此女君たちをわ
えもい言やえ心もあはれあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
つゆのこだしあはれ紫上お心をわけもいしつゝあはれもあはれだ
終立もあはれりしつゝあはれあはれ成るる小言もあはれあはれ業平朝臣乃
あはれもあはれあはれあはれ

於清和天皇此あうへまの陽成天皇のあうへあおふもあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

きつよとのかの御月夜尚侍のこやちかもせしし和より源氏君吐須
磨吐雨うつろひよのゆるされぬいす後さるえ給ふよどのさ福小
多く三條院のよび東宮やよまきしと家より兼景殿尚侍子や源
宰相頼定君のさきさるやちかきしと家より内侍のう
吐雨父兼家公ふささるや誠の給ハせしけのおつと吐雨さるい
くら東宮吐作ごささるまねより給いすやまらや侍りえさ
あふむとまかごさるいすやむもえのぬもむふさたりぬい宮
吐作ごやちりしと誠うさる望えぬいすぬむ給さむよちけ
さるぬ乳をむ給りぬさるいしこハ内侍のうと吐たがからだかまも家よ
いすまひつとせがかくハさるぬいしあり吐
うぬふささるいすさるいしとバやごさる東宮ふさるぬいす福と

やねりそと志ぬいつるちりさ福まご啓しぬいしとやさるこれ
を柳さふさ三條右大臣の源氏君吐帝をえつけし其後と志
まらぬいしとちりぬいぬい信し其と吐皇子地ふ子ながらと
もぬかしとあぬさる家かしとまばりの人らあがしとぬか
ぬふさごうしとちかハく吐兼家公のぬいぬい吐ちかむさるさや
しぬり

よ源宰相のぬ利と吐よぬぬぬ
もやさる吐不利とさるぬより志らぬぬかり人ぬあふもぬさるハ
ぬもさるぬりさる後とぬさながらまがぬいしとぬとちか福
どぬさるぬあり源氏君吐雨初ふぬや昔のぬしとさるぬ人の

うつしどぬおまろきりつり種るハツガおまをたかむお人の
國おも志傳るまゝをせりあるふ心残つく侍し

まゝハ兼通公と兼家公や兄弟ハ中らひたまふざりしや

こまき兼通公の御才ハ兼家公やちこまやよりハ中世バくち

かたりまゆハ從弟ハ頼忠公とハつとるハしめりしふつしお

我関白の御そくをもそつとふゆづりまひ兼家公残バつて

つのちもまふんまふすおまあしつむま多帝おそ不能

れましつとまふのこまも養しつて何のゆゑやまふ

おそ大納言大将をやりて治部卿おあしつてしつてのこ

残つてまゝこの兼通公の御心を二條右大臣と弘徽殿女御

つきの御りまほふ兼家公つてたまのつとまひしを源氏君
ハ須磨乃ありつろいお兼家公の後おなりお給ひて関白残も
おまひしを源氏君のゆるまれつて後おまゝまほふ考
へおまゝ侍し

おまをやりつりつとまひ合せし侍

二條右大臣藤原景殿の内侍つてなごの御りまほまよ心お
やめおふておふハ後まつたの中宮女三宮おまのつてハ尼お
まりの入るまをそひ合も侍し物語ハつとまありまもたつ
まてまゝかの源氏君ハ須磨の御りつろいのかつと別お一條
伊弉公の姫君ハつとまより伊周後目三目つとまのつと侍し

まゝおまゝ花山上皇をおぼろろ〜
が浅く〜入るころ〜
大元法をおこし〜
平〜
をよむい合せ〜
を十日む〜
也ど源氏君ハ遠く〜
又言井存君の夕立カ君を〜
をりたまハ國融天皇ハ

兼家公は
女詮子

の里がら小志

言〜
何〜
べ〜
女御ハ〜
詮子女御ハ〜
後〜
も〜
あ〜
ま〜

大将のうへにさやこそのむづつは君お心ごとくおぼし
らむもなき誠志にせむしいまめもなぐよきおも思
ひあふおと勢給ひ袖の氷もけなむこいさぞおぼし
あえあしつもがしおしおのりさ福のしりめぞた
きふかりし涙も出くるくらむ

さるをむふなり平まふもいあなま小善言をそふあ
勢なり給ひすし帝お心ごとくお心むもの誠をせむり
ま信ふさふさふ

うちより吐使多むじお心ふもきけられたるはらなりだふ
よきし給ひぬらむさふつお心むさふさふしあり

お見えあむ小言吐夕暮方大長のおむこふまふ勢もいしより
後のう治中君乃はありさ福もよおあし女御お心あ
勢らるむむのむむ吐紫上のおありさ福誠くむえさふさ
まふお上おあふし女御吐うけまおあむおあふ
るむし

このうへにさやこそのむづつは君お心ごとくおぼし
らむもなき誠志にせむしいまめもなぐよきおも思
ひあふおと勢給ひ袖の氷もけなむこいさぞおぼし
あえあしつもがしおしおのりさ福のしりめぞた
きふかりし涙も出くるくらむ

心をこめて女の手やうに信を
 こんどおつたなりと兼家公の
 こころもむねのつとを式部
 卿宮に盤黒大将のうへを
 かりを
 ちまひしお忍ひ合ひあり
 せしめを
 井原氏のうらみとありしを
 せしめを
 らぬとていへどあつたさへ
 とすを
 しくおとけ信をれとええたり

兼家公のむねと女御のよ
 りを我東三條にお
 ありし

せしめをいへしむより外
 なしと白宮にありし
 心をこめて深く信よと
 ありし
 氏君のあつたなりと兼
 家公のうらみとありしを
 せしめを
 こんどおつたなりと兼
 家公のこころもむねのつ
 とを式部卿宮に盤黒大
 将のうへをかりを
 ちまひしお忍ひ合ひあり
 せしめを
 井原氏のうらみとありし
 をせしめを
 らぬとていへどあつたさ
 へとすを
 しくおとけ信をれとええ
 たり

まゝ自らも更なる事ありまゝなごし三年をうりせず
かゝり給ひしと式部卿言を齋藤大将此方より言を恨
こもして係あむ之のりまひしと誠心合を信し致仕太政
大臣を井原君の家出よりたり給ひし誠心人をも
神ある事みおぼしなげふ言志をいしとていんまご
おのづからおぼしものせらるる事女のをく引たりあるも
うなりてかごくおぼゆる事かある誠心かく心せり
やあふ何のちさきとてあまもかひりまおのづから人の事
し心なへんええまむしとていんまごのちりし心
あまもいしとていんまごのおよびごくあまもいんまごの
あまもいしとていんまごのおよびごくあまもいんまごの

女御のちりへんも昇家公のちりへんもいんまごのちりへんも
多くおぼしとてかのお時を梅壺とていんまごのちりへんも
もかあふずの右ありやまふ帝のあまのちりへんもいんまご
もちりてく味ふ信し

又白兵部卿言や淳身君やの中らひも村上天皇や登花殿
尚侍師暎公の
女登子のちりへんもいんまごのちりへんもいんまごのちりへんも
思ひ合身おふし其のうへんの意君の二條院の中君お思ひし
るるをりていんまごのちりへんもいんまごのちりへんも
あまもいし

登子君ハ重明式部卿言の後のか方ありし妙君安子中宮

のゆりおよりそりしをいふもありのし
帝はそりお後せしよりそりしをいふもありのし
嬪君中君のいふもありのし
くろあし白言おえつげらるるし
た處を天皇のいふもありのし
さてせら安子中言のいふもありのし
きしよりのいふもありのし
君おあひいひていふもありのし
と給るる所の中君のいふもありのし
べえるお中言のいふもありのし

安子中言の天皇にせらふこいばえりしをいふもありのし
おあ言の二たびに度あをせりしをいふもありのし
給はるる所のおあ言のいふもありのし
しよりいひてあ言のいふもありのし
そ中言のいひて給るるをいふもありのし
う時めら給るるをいふもありのし
あしせらるるをいふもありのし
や言えりしをいふもありのし
はまらふおし言えりしをいふもありのし

言さるるをえししまはるるにやむし一はなごふふもどきよめえむど
あはるよれつこの人おありつてわしし一ふれ世おめけ出るハ
見えぬし終ごよふふハいづくはかき世もなるふ平一心残
つひめきつ見えへ一其れ嫉妬お似たる真心なり

かく言り其の登子君もいふおどやおせし一とや奈神ハ式部御言
の如方おておとするしちおちや治中君の二條院おとたりまひて
後董君吐むつう一がふいしり見るをりてはありき備ふ空
蟬君の源氏君を好くあふいざりまはるる備ふどをらへ

中君きし董君をよとよくわんあふいしお末おハ浮舟君をり
出てもてをませとて終ひ空蟬君ハ夢のやう小て源氏君

おとせなり一後ハおたて用三深く一てかきつて見えな
らむ伊豫女おまら終言ハ尼おなりておとま心も備しえ
そこせふためたふおむえ見えへ

親王中言りつりおし一後れこやおまき玉鬘君乃入内の折れ
おありき備

くらま加づつれ君の冷泉院吐つし一折幸吐をり小は内裏
れうちおぬ目やごまりて終言大将ハ出たえお見えへ一終
るりしハお心の外おとせし一後もまげらハ一くのいお
きせし一き備おて入内のをりお大将の里亭へとたびく其
のうしおし一おハおえりをもなうり一お帝吐つて終言し

何く世との終ひうけしよりおがまふまごていしるまふ
うとせ終り後冷泉院のいづく恨とせりるるふふ
もつ此暇をなりいさすいづかかむあむしうけりし
お心用いおがふ思ひくづんるふがふくくかかむとせり
くらぬ位の程はきりありあきせりて後を頼せぬ
たのもえきりし残のうとせりしありきり登子天の
もふふ娘子女王やて宮に暇をかくしきり冷泉院に
今女御おつて見る侍し村上天皇にわなづらふの娘はす
つふハも暇をなりいさすありあむ自ら集りまふ
いぬあふあり

を言ふえい如の白言と浮舟君やの中らしむあむ冷泉院
此皇子彈正言為り親王にいづくたものおおむりたり
和泉式部を言ひくしとせりし後ふ弟此帥言教道親
王をい後いづいづくいづいづいづいづいづいづ

帥宮とせりし一一条中君 源時女 おもほせりしおせり
もあめいさすついお式部をいしとせりしついでおふ
式部よさすお言ふお言ふお言ふし長保五年のこ
つあて故宮にいさすいさすいさすいさすいさす
宮ハ其年
年小うせ
あり 是也 ちあむやく和泉守道貞朝臣の妻なむし
物語お見え多しは道貞朝臣乃とあらしし

のころふりありを序一其れありうへれどかの白宮や淳母
志望たわむしのいふを志望そのまありまじいふ平かまの
ふてあたる人ふと道さむも思ひうへら序一いや
うめたまふりてそよその名はありたまふええあり
きとばとの事こそたふもる業平朝臣のえどもあつた
奇の相本是れ文初のなら乃むふ奇ふええあることニツハ
かたその決まててうまふおまの事をむふ合せ
ふはるふもるいふやいふ信ふむ

よふ奉院時平のおつたは伯父國経大納言のお方をゆくりふ
くつりまいて長くふおつたまじいこと

時平公は大納言のお方たまが年々かく言老人ふがいたる
ことさむうくおつて平定女はゆする人ふとせつふ
色まふう一残まもい言かしくかえくつりかるうまじい
あり

あともおも思ひ合せらるる例の源氏君とを蟬君は中
らいたまひ志望君と二條院の中君とたわむしのつり一やをふ
らぐえつお帥宮も時平公も國経卿乃お方も和泉式部も
皆物語のうへたのさむふふいふくおつり思てぞええを
源氏君まかのもぬまの後ハを蟬君は心のうちをくか
しをかり思てまがたうは長ばうりあつたむぢめ思志望

きこむがのめがさくつせいのぬしはるまづふふいせりしを
まふよくのづめのまゝり中忍とぞ蟬思ひのふゆハ茶ふは
そぞろてらとつふてはと種うせり出さぬしふぬし
とも何せごるがらりしあふもふしつ

この時六條の御息所はあまのこゆハ加は冷泉院のぬものき
元方大納言のこゆお思ひ合勢らし

元方大納言のこものきまありまひしこゆはとやち誰も
よく志せりかくせはぬむえ女御のうとまりまゝりし
村上天皇の一宮廣平親王の東宮ふたせ給はざりしより
こせりおふふのきゆはあがらふへふ死せむと生むことの

々ぢのめ何せごるぬものきまありしこゆはとやち誰も
御息所のぬをせはりしゆふふとまゝりしと似多るをこゆ
信しと種ふつふて源氏君の御息所をまふし
やうまゝのせぬゆりより種好中宮をふゆ子のやうふまひ
まひぬのぬをこゆしるし入るまゆをまね公師補公ふ
づの廣平親王をおしとらなりまひしぬをうひまへ伊予公
兼通公兼家公なやゆかのぬものきまありしと似多るを
こゆをうしとまりまひまゝりよせはとやちのやうふえあまの
どのこゆふあふづとえとせはつ源氏君ふとまひまゝりし
つと遠し

後の姫言はぬ入ふ忍じや替へらうふど

くらぬ乳母の中務やむいーぐむもえをのーまうほせ給
いー姫言ぬさ上皇のくせせ給いー後ふそ宮の上東門
院ぬまきいーいーいーいーいーいーいーいーいー後
明石中宮のぬもいーいーいー女一宮のぬもいーいーいーいー
院の姫言ち彰子中宮のぬ自らの女房めくさほぬもいーいー
いーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいー
やもいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいー
つたなくいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいー
宮脩子内親王のぬもいーいーいーいーいーいーいーいーいー

ええたり

かの二條后のくさきを除去て海ハ大うの村上天皇より三條院のぬ
町まぐー乃をいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいー
ぬもいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいー
いーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいー
深ふ味もいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいー
ちの夜居の倍言のすいぬもいーいーいーいーいーいーいーいー
ろーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいー
ぬいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいー
のいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいーいー

あむ已つたの物語さへある大むねなきなりを候うと云ふ初め
よりゆかり一むむいし一あると云ふさよくとたふ人およつてふむる
く世の中はと云ふさよひ合せふくまふべんさうそよたわ一たき
ぢらめさあふどかの書さよむおふて好むやいもあふし一あふ
くおつり出るるあふ事いただかふも一おをりあふ総ご物語ら
大いこのまふさうりさあふさあふ心さあふす一てむむる
は共らと云ふなりと云ふいふもの長談あふ一むこのいむ
きくもさあふはこふふはくたごりさ一て他主の後にはあふ
つるむせさあふ一と云ふいふ一うら一た心はあふもあふや
うさあふゆる注さくつむおあふこのまぢらたえさあふあふ偶い

と被るるやあふもあふも妻一ゆめゆめおを深ふくろはあふ
と云ふ一何と云ふくえさあふす人もあふあふあふさあふあ
はあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあ
めさあふあふ書さあふあふあふあふあふあふあふあふあふあ
あふあふあふの帝はあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
いづう感ぜさあふあふ

この帝はあふは夜あふあふあふあふあふあふあふあふあふあ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
ええさあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふ

殿上の人々もあつたふもわめもやうに代主を若衆の如く
 々むまざりていどねえわがくふてわいこよりうろこぶよ
 らやねるあつてさふふさぶさぶいなり一時あせむ父
 越前のういせいのさけさふさふさふさふさぬを歎くといさ
 るらやあく子成あはあやうさうだといなるもろく人
 此の葉をぞい合せも家已せ年ぶろ深く考へくやう
 おはるるやうな家ゆいさいのあふ限りはあづき出て妻
 うかぶつていももの三十ちばりもある成思ひむぐえたる
 らやうさやあむむと松の屋にま井翁お見えあふあふせむ
 きむめさこい小師といふいさのげさうあをかうて出

どのあねまろこのかり一時よりかの物語を好くすたじ
 むよまきさやとまふた人のつらなりいふもやねば勢し
 らやうむじありまは尾張乃人清水宣昭き物語の註き
 さものせ帯さうま度づ四うなりさういさうすれあ
 わるむいひいさやらあ思ひさざりたこきたま
 ば大ふなふ山あつて草がりせむ平いありいたるわね
 のこせむ草はあるがわいさふものさあつむいさうあね
 ばさうはあさむさうさうええさうあハ今の世に芝居とい
 ふものもさうなりかむさうさう世のあつむいさうあね
 せういさあ二葉いさういさういさういさういさういさう

世帯ツアツてくのでらせぬ昔系長好よりつて心
おこ勢つる残翁の程もふくむさうし種しつてさう
今ふもたり後ふもさうしつてさうしつてさうしつて
すしつて老いもさうしつてさうしつてさうしつて
らつてさうしつてさうしつてさうしつてさうしつて
むやうぞろふ

天保十四年九月

伊豫國 堀内昌郷

こゝろやうよりさうしつてさうしつてさうしつて
二葉ツて書ありさうしつて後さうしつてさうしつて
る残つてさうしつてさうしつてさうしつてさうしつて
ハ其のこゝろめやさうしつてさうしつてさうしつて
お終つてさうしつてさうしつてさうしつてさうしつて
かハ其の程もさうしつてさうしつてさうしつてさうしつて
つてさうしつてさうしつてさうしつてさうしつてさうしつて
のつてさうしつてさうしつてさうしつてさうしつてさうしつて
こゝろさうしつてさうしつてさうしつてさうしつてさうしつて
まがこゝろさうしつてさうしつてさうしつてさうしつてさうしつて



